

国語科より

【3 学期漢文特別講座（新高 3）】

1. ご受講に当たって

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

- 筆記具：鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの
- 辞書：国語辞典(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)
授業中に使用することもあります。復習・予習の補助としても使用します。漢和辞典も使用できればなお良いでしょう。
- ファイル：クリアファイルなど(配布されるプリント、テストをまとめるため)
- 夏期講習・冬期講習の「漢文」テキスト：巻頭の単語・句形などの情報を適宜確認します。

② **Gnoble** の授業内で配付されるもの

- 通常授業テキスト：1 月 1 回目の授業内で配付
- 書き下し文・現代語訳・模範解答

2. 授業の進み方と日々の取り組み

① 学習効果をあげるために

▼ 3 特別講座漢文の授業の流れ

前回実施した漢文 1 題を素読⇒ 宿題の解説⇒ 授業内演習の実施⇒ 授業内演習の解説

▼ 3 学期特別講座漢文の授業で意識して欲しいこと

人は言語を習得する際、「聞く」→「話す」→「読む」→「書く」の順を辿ります。解答を「書く」ためには、それ以前に膨大な量の「聞く」→「話す」→「読む」が必要なのですが、現代の日本で生活するなかでは漢文を「聞く」ことも「話す」こともありません。そこで「聞く」→「話す」→「読む」の体験を身体に蓄積させるために、徹底的な「音読(いわゆる漢文素読)」を行います。英語で音読が重視されるのと同じように、漢文においても音読は非常に重要です。

また、漢文を読む際には

- 1: 文型の理解
- 2: 句形(約 20 種類ほど)の理解
- 3: 漢文の基礎知識

に留意する必要があります。授業内で担当者がもちろん解説を加えますが、自分で漢文を読む際に上記の点を自分の力で発見できるようにすることが大切です。解説では黒板に本文を書き出し、ポイント部分を全て色分けして、重要点を疎かにしない解釈を提案します。どうすれば正しい解釈になったかを各自が自分で考えられるようになってもらいたいので、一方的な解説ではなく、「発問→解説」を心掛けています。授業を最大限に活かすには、自分が指名されているときも、そうでないときも、当事者意識を持ち、主体的に参加することが期待されます。

② 授業の進み方

▼ 全 6 回のカリキュラム

- 第1回 読みを問われる語句の復習、再読文字復習、読解演習 (GMARCH レベル) ①②
 第2回 重要漢語復習、重要句形復習、読解演習 (GMARCH レベル) ③④
 第3回 同訓異字復習、句形再復習、読解演習 (共通テストレベル) ⑤⑥
 第4回 復習テスト①、読解演習 (現・古・漢融合問題含む) ⑦⑧
 第5回 復習テスト②、読解演習 (国公立難関) ⑨⑩
 第6回 復習テスト③、読解演習 (東大他) ⑪⑫、今後の学習アドバイス

▼3学期漢文特別講座を受ける上での注意点

- 第4回以降では、第3回までの内容(句形・単語・読みなど)を復習するテストを実施します。「9割以上取るのが当たり前」という定着度を目指してください。
- この6回の授業で漢文の基礎を固めるとともに、初見の長文を理解する助けとなる漢文常識も身に付けてもらいます。基礎から入試問題演習までを6回で学ぶ集中講座であるため、重要なことは「休まずに授業を受けること」(やむを得ず欠席する場合にも「映像授業」サイトで教材のダウンロード・演習・動画視聴を必ず行うこと)と「毎回の授業を丁寧に復習すること」です。

③授業外で

▼宿題と復習

▽漢文の宿題

①事前課題への取り組み方

まずは1度自力で音読しましょう。読み方がわからない字は漢和辞典を引いて音読みで読めば大丈夫です。その際、重要句形・重要漢語等に気づいたら、そこにチェックを入れておくことも重要です。また、必ずしも何かを書く必要はありませんが、読みながら内容を自分なりに理解して、現代語訳を考えましょう。その後、問題を必ず1度自力で解いてください(=解説されるのを待ってはいけません)。

▽漢文の復習

漢文の復習は、理解度や復習にかけられる時間に応じて、以下の3段階の方法を提案します。

①簡単な復習(10分ほど)

授業を集中して聞いて帰宅した後、その日に習った漢文を必ず1度以上音読してください。また、授業から1日以上経った後にも音読してください。授業を受けた日の寝る前や、翌週の授業開始前の時間などに、「復習用の書き込みのない漢文のページ」を眺めて重要箇所を確認するだけでも十分に意味があります。

②時間をかけた復習(30分ほど)

授業で一度扱った文章を自分で現代語訳してみましょう。何かに書いてもかまいませんし、頭の中で訳すだけでもかまいません。その際、文の構造や句形や重要語句に気を配ることが大切です。現代語訳を作ってみるなかで、授業中、理解できていなかったり聞き取れていなかったりした部分が見付かったら、担当講師に質問しましょう。

③漢文知識の確認(時間が取れるときに5分～10分ほど)

授業時に配付するテキスト内には、最低限覚えるべき句形や漢字の読みや漢文語句があります。宿題を解く際だけではなく、少し時間が取れたときに何回か見直して覚えましょう。また、その際、疑問点が浮かんたら、担当に質問しましょう。

漢文は「できない」のではなく「読んだ量が少ない・勉強量が少ない」から現在点数が取れていない科目である可能性が高いのです。素読し、一定以上の量に触れれば確実にできるようになります！ ぜひ高3になる前に得意分野にしましょう。

(参考資料) 受験科目「国語」の特質と長期的展望の必要性

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- ・東大……………理系でも二次試験まで必要
- ・東工大……………二次試験、国語無し。共通テストでは受験するが、最終合否判定における共通テストの重要性が著しく低い
- ・国立医学部…二次試験に国語があるところは東大・京大など限られるが、共通テストで高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、選択問題・記述問題という形式に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。私立文系の大学では、学部・学科ごとに出题範囲・形式が違うこともしばしばです。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのよう必要であるかを調べるのが相当に重要です。配点等を調べると同時に、実際に解かなくて構わないので、早いうちに過去問を見てみることを推奨します。

こうした入試制度に鑑みた上で、グノーブル国語科では、高校生活3年間の国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

(中3…古文入門 [冬期講習]・現代文入門 [3学期])

高1…古文 [春期講習からの通年講座、1年間完結]

高2…現代文 [春～12月] (文系、東大・京大志望の理系)

古文 (高1で未履修の者) [春期からの通年講座、1年間 (もしくは春～12月) 完結]

※高1・高2の夏期講習と冬期講習に「漢文」開講 (どこかで1回受講する)、それを踏まえた長文演習講座として新高3 (高2) の1～2月に「文特別講座」開講

※新高3 (高2) の1～2月に「古文特別講座」(高1・2で未履修の者向け速習講座) 開講

高3…志望校別の対策 [春期講習から直前講習で完結]

東大国語、難関国語、私大国語、小論文・医学部小論文

※難関国語は京大・一橋大・阪大・東北大・筑波大・お茶の水女子大など、2次試験に記述の国語を課される大学を受験する生徒向けの講座

※私大国語は早稲田大・上智大・明治大・立教大などの文系学部を受験する生徒向けの講座

※4月の入室テストで不合格の生徒は4～7月開講の基礎力強化講座「受験国語基礎」にご案内

※夏期講習と冬期講習に「共通テスト国語」開講

学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。

いずれにせよ、高3になって慌てて古文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる (関わりそうな) 場合は、高2までに古文 (漢文を使用する場合は、漢文も) の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。